

福島は今（飯館村・浪江町）を見る

事務局 藤崎薫子

5年を過ぎて、やっと福島原発被災地を訪れる機会を得ました。退職教職員の会の学習会に個人参加しました。2016年11月13日、夕刻2時間、現況報告。14日は夕刻16時までバス1台で、飯館村・浪江町見学。短い時間での学習で「見た・聴いた・知った」とは言えませんが、以下ミニ見聞記です。被災地福島に思いを馳せ、我が郷土大分に思いを巡らせてください。

飯館村はフレコンパックの山また山が続く

田んぼや野原に汚染した土を入れたビニール袋が積み上げられている。むき出しのもの、その上に緑や黒のシートがかけてあるもの、バスの行く手に次々と現れる。飯館村には170万袋、1km平方当たり7000個。「4年後のオリンピックまで片付かないだろう」と国の担当者。人の姿はない。こんなところに人は帰ってくるのだろうか。今は汚染土となり果て行き場のない厄介者だが、この土こそ、村人が何代もかけて作りあげてきた肥沃な土であったと教えられる。村人は、その宝の土を失ってしまった。



写真はブルーシートに覆われたフレコンパック

国は飯館村に2017年3月31日の避難指示解除を通過（2016/6/15）

村役場だけにはその準備のためだろうか、車の姿があった。国は仮設住宅の終了と精神的慰謝料の終了をリンクさせる意図あり。学校も保護者・村民の懸念意見を押し切って、2幼稚園3小学校1中学校を一つの中学校に集約計画が進む。はたして、子どもは何人帰ってくるのか。通学距離・通学手段は大丈夫か。

キノコを専門に放射線量を測定している人の話では、福島県内はどこもキノコも線量が高くて、絶対に食べられない。富士山のキノコさえも危険だとのこと。

浪江町は、まだまだ全くのゴーストタウン

津波に破壊され、放射能に汚染された家々の姿には息をのむ。もちろんあの日のままの浪江駅に人の姿はない。浪江駅近くに先祖代々住んでいたというレポーターも、南相馬市に新しく家を建てたそうだ。もう浪江に帰ることもない。

避難生活の人は1人10万円の支給

「被災地の人はいいもんだ。仕事もしないで金をもらう」。そんなことではない。知らない土地で、働くところもない、畑も庭もない。あたり前の生活が当たり前でできないことの意味は！ 仮設住まいで、酒・パチンコ・競馬と、すさんだ生活に落ちていく人も多い、と案内人は悲しげに話す。

福島原発の位置

（なぜ双葉原発と呼ばないの？ 原発に県名がつくのは福島と島根だけ）

実は恥をさらすと、私は福島原発の位置とその被災地の地理的關係を正確には知っていなかった。原発は双葉郡双葉町、隣の浪江町は反対したので双葉町に建ったのだそうだ。伊達・川俣・二本松・本宮・田村など内陸部の市部の除染は早期に済んでいて、残された双葉郡内の各町村への対応が急がれているという現状のようだ。しかし、果たして帰村は可能なのか。未来へつながる道はあるのか。チェルノブイリを見よ。

私の中には残念ながら否定的な思いが募っていくばかりだった。

避難指示区域の概念図

